第16期「教師力養成講座」を終えて
「主体的な学びを実現するための授業づくり」

受講生氏名：小田　帆夏

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

めまぐるしく変化していく社会において、変化を前向きに受け止め主体的に行動する力を育成することが、現代の教員に求められていると考える。

これまで、教育実習や学生ボランティアで学校現場に入らせていただくことが多く、様々な先生方の授業を参観させていただいた。その中で、児童の興味や関心を引き出すとともに、児童の発見や気づきをひろって授業を進行する教師の姿に感銘を受け、児童が主体となって学ぶための授業づくりについて学びたいと感じた。

そこで、現場の先生方が具体的にどのような工夫をされているのかを観察し、児童が自ら進んで学びに向かえる授業づくりについて研究したいと考え、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　配属学級における担任の先生の授業参観
イ　発問の言葉、発問までの動き、児童の様子の観察
ウ　体験授業、研究授業での実践と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期演習では第４学年、後期演習では第１学年の学級に入らせていただき、それぞれの発達段階に応じた工夫や、児童が主体となって学ぶことのできるような授業実践を観察した。また、日常生活や授業内で積極的に児童と関わり、児童と近い目線で児童理解に努め、授業実践に繋げた。担任の先生と振り返りや話をさせていただく中で、授業や学級経営の中で大切にされていることや工夫されていることを学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

ア　授業における工夫

前期演習と後期演習でそれぞれ別の先生の授業を見学させていただいた。どちらの先生も授業の中で、児童が活躍できる場を多く設定されていた。普段からそれぞれの児童の理解度や特性を理解されており、授業の中で活躍できそうな児童を意図的に指名することで児童が主体的に学べる授業づくりをされていた。

実際に授業をしてみて、導入の際には、児童にとって身近な例を挙げることで心を掴み、学びたいという気持ちを引き出すことができた。しかし、その後の展開では、あやふやな発問や説明をしてしまい、児童が何をすればよいのかが伝わらず、混乱させてしまった。主体的な学びを実現する授業の難しさを実感した、学びの多い経験となった。また、授業づくりと学級経営は両輪であるという認識のもと、児童の実態を具体的にイメージし、主体的な学びを実現する授業づくりをする必要があると学んだ。

イ　児童との関わり方

朝の挨拶や机間指導、休み時間の遊びを通して、「気づく力」の大切さを実感した。児童をよく観察していると、いつもより元気がなかったり、悲しそうにしたりしている様子に気づくことがあった。このことから、まずは「気づく」こと、そのために日頃から一人一人の児童との関わりを大切にしていくことが重要だと学ぶことができた。

３　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、授業や学級経営、児童理解をはじめ、様々な分野の知識を身につけることができた。また、講師の先生方の講義を聞いて終わるのではなく、受講生同士で議論し話し合うことで自分にはない考えや価値観に触れ、多面的な視点で考える力がついた。その中でも特に印象に残っていることは以下の２つである。

１つ目は、「ICTを活用した授業実践」の講義である。この講座では、ICTを活用し、個別最適な学びと協働的な学びを組み合わせて学ぶことの大切さを学んだ。ICT機器を、より効果的に活用するための方法や可能性を考える中で、ICTを使うことを目的とするのではなく、児童が主体的対話的で深い学びを実現するための手段として活用することが大切だと学んだ。

２つ目は、「小学校における児童理解と学級経営」の講義である。講師の方の、「児童や保護者の、知ろうとしてくれているという感覚は、教師とのより良い信頼関係の第一歩。」という言葉が強く印象に残っている。この講義で、行動だけで決めつけずに相手の言葉にしっかりと耳を傾け、想いを受け止めることの大切さに気づいた。

これからは、講座で学んだことを意識しつつ、児童に安心感を持たせる対応や、教師としての引き出しを増やせるよう、多くの経験を積んでいきたい。

４　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力の向上

実践授業では、時間配分や明確な発問、問い返しや板書など、基本的な技術を身につけることができた。板書では、学年ごとに気をつけるべきポイントがあり、とくに第１学年での実践で、１文字１文字を丁寧に濃く書くことができるようになった。また、授業後の事後研究会では、自分の授業の良かった点や改善点を俯瞰してみる力がついたとともに、他の演習生や担当の先生、校長先生のアドバイスを受けてよりよい授業への視点が広がった。

この経験から、さまざまな方法を模索し、繰り返し実践して改善し、児童の実態に合わせて授業をつくることの大切さを実感することができた。

(2) 児童との関わり方

演習の中では、教育実習での反省を活かし、積極的に児童に話しかけ、関わることを意識した。児童との信頼関係を少しずつ構築することができたとともに、児童一人一人に応じた支援の仕方や、接し方を学ぶことができた。しかし、第１学年の児童との関わりでは、学生という立場であるゆえに甘えられることが多く、児童が自分で出来ることと、支援が必要なことの区別の仕方に苦戦した。この経験が、児童一人一人の発達に応じた関わり方を意識していくきっかけとなった。

５　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

京都府教師力養成講座に参加することで、教員の仕事を間近で見ることができた。教員の仕事の責任や大変さも知ったが、児童の成長を間近で見たり児童と一緒に喜びを共有したりすることのできるというやりがいや魅力を感じ、教員になるという思いがより強くなった。また、私自身が主体的に児童と関わることで、児童の心が少しずつ開いていくことを実感できた。この感覚を忘れずに、前向きな姿勢で児童と関わっていきたい。今回の経験と、私の明るく優しい性格を活かし、児童を愛情いっぱいに包み込む教員になれるよう、自己研鑽に励んでいく。

(2) 今後の課題

課題としては、授業実践力だ。45分という時間の中で、学ばせたいポイントをつかみ、児童の発言を大切に授業をつくっていきたい。教員として、児童が主体的に学び考える力を授業で生み出せるよう、教材研究や児童理解を通して学び続けていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「ひとりひとりの児童の支援と学級づくり」

受講生氏名：荻野　紗瑛

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

これまで教育実習や教師力養成講座の教育実践演習で多くの授業や学校生活の様子を見てきた。教師は30人前後の学級で児童を担任し学級経営を行なっていく一方で、ひとりひとりの学習支援や日々の生活指導も行っていく。細やかな個別の支援、最適な学習を行うことが求められる中で、こうした学級経営という全体への働きかけと、それぞれ特性の異なる児童へ指導していくことの両立をどのようにしていけばよいのかに関心をもつようになった。この個と集団での関わりの両立に注目して観察することで、自分が教員になった際に授業内外での充実した指導をもとに学級経営を行なっていくことができると考え、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業外の学活や休み時間において、教師の児童との関わりの様子を観察する。

イ　授業中の教師の個と集団にかける発言の量や内容に着目して観察する。

ウ　授業実践を通して児童と関わり集団と個への指導を試みる。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期の演習では、進級に向けた学年のまとめを行なっていく様子を授業やそれ以外の場面で観察を行った。後期の演習においては、新学期が始まり学級開きを行う中で児童と担任がどのように関わっているのかについて授業やそれ以外の場面で観察を行った。特に、学級担任が個と集団にかける言葉の量や内容に着目し、どのように個別指導と集団指導のバランスをとっているのかに着目した。また、自身の授業実践を通して集団指導の中に、どのように個別支援を組み込んでいくのかを研究した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　目的を明確にした机間支援

授業の中で、個人で考えたり作業を行ったりする活動の場面で、発問や指示を全体に出した後に机間支援を行う様子が多く見られた。個への支援の方法として多く用いられるが、全体への意識も忘れないためにきちんと意図・目的をもって机間支援を行うことが大切だと気づいた。このような気づきから、授業実践において学習課題に困難を抱える児童や集中力が保ちづらい児童に対し机間支援を重点的に行なった

イ　個から集団、集団から個へ

この演習テーマを設定した段階では、個への指導、集団への指導というようにそれぞれ別の視点として考えていた。しかし、演習を通して学級全体への支援が個別支援にも繋がっているというように両者は互いに作用し合っているということに気づいた。児童同士の助け合いや教え合いを活発に行う姿が多く見られる学級では、集団への声かけを多くしなくても児童が主体的に助け合いながら話し合いを行なっている場面が見られた。そのような雰囲気を学級づくりや授業の中で積み重ねていくことで、集団への指導が個別支援にもつながると考えた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の目指す教育のあり方や教員に求められている資質や能力について実際に事例等をもとに学ぶことができた。また、各講座でのグループ協議を通して同じ教員を目指す者同士で意見や考えを共有することで、自分の新たな発見や気づきにつながった。それらがさらに深い知識理解になり、意識と自覚が高まった。

特に、人権教育についての講座では京都府が人権教育を重点的に行なっているということを学び印象に残った。「京都府教員等の資質能力の向上に関する指標」(平成30年策定) では、７つの観点のうち人権は京都府が独自に設けている観点であり重点的に取り組んでいることを知った。このような特徴をもつ京都府の教員を目指す上で、人権課題について組織的に取り組んでいくための高い人権意識が求められることを再認識した。また、児童たちが集団の中で良好な人間関係づくりができるように、「ちがい」を認め合える学級づくりを行なっていく覚悟が芽生えた。児童が安心して通うことのできる学級、学校づくりそのものが人権教育になり、基本的人権の尊重になるという意識をもって取り組んでいきたいと考える。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

授業を重ねるたびに成果と同時に改善点を得ることがきでき、授業をする上での自分の癖や得意なポイントを見つけることができた。また、同じ演習校の演習生の授業を積極的に参観することによって、客観的に授業を分析することができた。

特に、授業作りの中で「学びの必然性」を児童自身が感じられるような発問や流れを組み立てることに苦戦した。実践した活動としては、学習したことが生活にどう生かされているのかを振り返りなどで考える時間を設けることで、なぜこの学習が必要なのか、もっと学びたいという思いを引き出すことができた。

一方で、授業の流れの中で生まれた児童のつぶやきや疑問を拾い、さらなる思考を深めるきっかけとして広げていく臨機応変な力はまだまだ未熟である。視野を広げ、児童の思考に沿った授業計画を立てることで授業の幅を広げられるよう努力する。

(2) 組織で動く学校を実感

教育実践演習では、新学期に向けて学校が動き出す春休みの期間にも演習に行かせていただいた。そして、卒業式や入学式の準備、当日の式にも関わらせていただき大変貴重経験をした。その中で、細かく役割分担された教員同士が連携しながら学級開きや式に向けて動く姿を見ることができた。日々学校生活や授業を支えるために、一人ではなく組織で取り組む大切さを学んだ。私自身、組織で動くことで充実感を得ることができ、自分も学校の一員として携わりたいという思いが一層強まった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

講座や演習を通して、児童の置かれている社会と求められている教育の姿を学ぶことができた。最も大切にしたいのは、児童が安心して包み込まれている感覚を育てることである。良さを認め合い、喜びや達成感を共有することのできる学級づくりを行なっていくことを心に決めた。

(2) 今後の課題

教師として最も大きな仕事である授業をさらに改善していく必要があることを実感した。個と集団へのアプローチのバランスを授業の中で臨機応変にとれるようにしていきたい。また、授業に向けた児童理解も日々の会話を通じて積極的に深めたい。

第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「個に応じた支援をするためには」

受講生氏名：小島　美穂

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定の理由

私は、教師力養成講座を受講する前に教員養成サポートセミナーや学生ボランティア、教育実習に参加させていただいた。実際に様々な児童と関わる中で、通常学級に教育的支援が必要な児童が多いと感じることがあった。特別な支援を必要とする児童への支援は、学級における全ての児童にも通じることである。児童が学校生活を過ごしやすくするために今回の教育実践演習では、今の自分に足りないところに向き合い、困り感を抱える児童への支援について研究したいと思い、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　児童と積極的に関わり、児童の特性を掴み、対応の仕方を学ぶ。

イ　担任の先生の声掛けや取り組みを観察し、自分なりに考察する。

ウ　先生方の児童との関わり方から学び、実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

演習の前期では第五学年、後期では第三学年の学級に入らせていただいた。前期は、学期末の児童の様子と個と集団の支援の仕方について観察を行った。後期では、新学期始めの児童同士の関わり方や先生方の関わり方の観察を行った。特別な支援を必要とする児童が社会的に自立できるようになるための必要な支援の様々を考え、実践を行った。児童が何に対して困っているのかに向き合い、考え、児童が「できる」ようになる為の支援を行った。授業実践では、児童が学ぶことの意義が実感できるように児童の興味・関心を「惹きつける導入」や「シンプルなめあてと発問」を心がけた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　児童の言葉や行動の背景を理解する

児童の言葉や行動に表れる小さな変化に「気づく」力の大切さに気付いた。そして、日々の児童の様子の変化や小さな成長に気付くことはもちろん、「なぜその言葉や行動をしたのか」ということに一度立ち止まり、児童の思いに気づくことの大切さを学んだ。意思表示が苦手な児童と関わった時に、相手に物を尋ねる言い方やお願いする言い方が分からないということが話を聞いてわかった。演習を通してまずは本人の思いを受け入れ、共感的な態度で話を聞く姿勢を常に心がけてきた。実践を通して児童の言動に隠れた背景を理解し、児童が示すサインに気付く大切さを学んだ。

イ　個と集団の一体的な指導を心がける

個に応じた支援だけでなく、個をとりまく集団の支援も欠かせないことを学んだ。支援の一つとして、できていない児童を叱るだけでなく、できている児童を褒めることで、周りの児童にも気づかせることや学級の目標だけでなく個々に合わせた目標を定めることで小さな成功体験を積み重ねながら集団の志気を高める。目の前の児童と向き合い、その児童ができるようになる為には何が必要かを児童の目線に立って考えることが大切であることを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、現場で実践を積み重ねてこられた先生方からのお話を聴き、人権教育や特別の教科道徳の授業実践についてなど様々な分野の知識を得ることができた。また、グループセッションを通して、多面的な考え方を身に付けることができた。

特に印象に残っている講義が、第４回「小学校における児童理解と学級経営」の講義である。講義の中で、「子どもの思いや考えは保護者ともつながっている」という言葉が印象に残っている。学級経営の充実を図るために児童だけでなく保護者の方とのつながりが欠かせないことを学んだ。日々の教育活動を通じて学級経営の土台となる児童理解は、教師と児童の信頼関係を築き、児童相互のよりよい人間関係を育むことにつながる。講義内容を生かし、課題点を克服できるように意識しながら、教育実践に取り組んでいきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 個々に合わせて支援を工夫する力

授業に集中し続けることが難しい場合には時間を区切る、ノートよりＩＣＴ機器を用いて打ち込むと理解が進むなど、個に応じて支援や理解の仕方が様々である。先生方から伺った児童の情報や児童の表情から最適な支援を実施することについては試行錯誤しながら机間指導で実践することができた。

児童は一工夫で「できる」ようになる。個々の能力に差はあるが、挑戦する気持ちやできるように導いていくことが教師の務めであることを学んだ。児童の心情は動作に表れることを知り、児童の行動に着目して何を求めているのか、どこまでわかっていてどこがわからないのかなど児童のつぶやきを拾いあげながら、一つ一つ確認して、その児童に合わせた支援を行うことの大切さを学んだ。

(2) 粘り強く児童と向き合う力

演習を通して様々なタイプの児童と関わることができた。特別な配慮を必要とする児童や不登校傾向の児童など様々なタイプの児童に対応していかなければいけないという自覚をもつことができた。また、「児童が学校に行くのが楽しいと思える学級・学校作りを行うためにはどうすればよいのか」という事を常に模索している自分がいることに、教員としての自覚・責任感が身に付いたと感じている。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、児童が成長していく姿を何度も目の当たりにした。そしてその成長を児童や先生方と共に喜び合うことのできる教員という仕事に魅力とやりがいを感じた。また、児童を褒めて伸ばすというスタイルを崩さず、児童一人一人の良さや可能性を最大限に引き出し、輝かせてあげられる教員を目指す。そして、どんな児童であっても粘り強く向き合い、決して妥協しない教師でありたい。

(2) 今後の課題

今後の課題は、「授業力」と「対応力」である。児童のつぶやきを拾い、児童が発した言葉から学びを深める授業を行うことに課題がある。授業の目的や意図をしっかりと持ち、シンプルな課題を設定して進めることを心がけて児童にとって分かりやすい授業作りを目指す。また、教員を演じることの大切さに気付いた。児童を怒るのではなく「叱る」、「諭す」ことを常に心がけ、様々な児童に対応できるようにこれからも現場での経験を積み重ね、教員としてのスキルや人間的な魅力を磨き続けたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「主体的に学びに向かう発問・導入について」

受講生氏名：櫛谷　瑞希

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教育実習を終え、児童が主体的に学びに向かうには、授業での学ぶ必然性を感じさせる導入や発問が鍵となることを学んだ。児童がどのような時に主体的に学びに向かうのか、教員がどのようにして学ぶ必然性をうみだすのかについて学びたいと思い、設定した。

また、第２期京都府教育振興プランでは、目指す人間像に向け、はぐくみたい力の一つとして「主体的に学び考える力」が示されている。そこで、どのようにして、このような力を育むのかについても学びたいと思い、演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　学級担任を始めとする先生方の授業における導入・発問・指示・声掛け等を観察する。

イ　先生方の導入・発問・指示・声掛けに対する児童の反応を観察する。

ウ　体験授業、研究授業での実践

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

演習前期は第６学年、後期は第２学年の学級に入らせていただき、授業観察と授業実践を通して研究を行った。授業観察に関しては、様々な学年、学級の授業観察を行い、発達段階に応じた導入・発問・指示・声掛け等の違いや工夫を観察した。授業実践に関しては、同一授業を二学級で行わせていただき、発問に対するつぶやきの多様性を実感した。また、児童のつぶやきから、学習のめあてを作成することや教具の工夫を行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア　意図・目的をもつこと

演習を通して、意図・目的をしっかりともち、指導を行うことの大切さを学んだ。直接的に伝えることも一つの指導でもあるが、『児童に気付かせ、考えさせる』ような意図をもった指導が、より児童の成長に繋がることを学んだ。児童の素敵な姿を価値付けし、その姿を見て、周りの児童に気付かせる指導など、何事にも、意図・目的をもち、指示・発問を行うことの重要性を学んだ。また、導入に関して、日常と結びつけて『学ぶ意義を感じさせる』ような意図をもった導入が、児童の主体的な学びに繋がることを学んだ。

イ　つぶやきから発問へ

授業において、児童のつぶやきを拾うことは重要である。だが、つぶやきを拾うだけではなく、つぶやきを取捨選択することがより重要になることを学んだ。単元・本時の目標に迫るつぶやきを取捨選択し、児童の声で授業をつくることで、児童の主体的な学びにつながることを学んだ。また、つぶやきに耳を傾けることで、児童の思考に合わせた授業が展開できることや、つぶやきを問い返して発問につなげ、思考の過程に沿った授業が展開されることで、児童が主体的な学びにつながることを学んだ。

ウ　学級経営と授業は両輪

児童が主体的に学びに向かう為には、『この学級なら、間違っても大丈夫』と思えるような安心感のある学級づくりが基盤にあるということを学んだ。学級経営と授業は、切っても切り離せないものであることを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教員に求められている資質・能力やこれからの教育や社会について理解を深めることができた。その中でも、特に印象に残っている講座を挙げる。

(1) 特別の教科　道徳

この講義を通して、『心はダイヤモンド』であり、心と心を磨き合うことで道徳性を育むことが大切であると学んだ。また、心が見えないときも見ようとすることが大事であるということについても学び、このことを、学校現場において、児童の言動を表面的に解釈するのではなく、見えない部分を見ようとし、児童理解を深める実践にも活かしていきたい。

(2) 教育実践講座

個別最適な学びや協働的な学びについて、一斉授業の中で、ICT端末を用いて、どのように個別最適な学びを実現していくのか学ぶことができた。個別最適な学びが独立した学びにならないために、ICT端末を用いて、協働的な学びに結びつけていくことが、令和の日本型学校教育において、大切であるということを学ぶことができた。ICT端末を利用することを目的化せず、学びを深めるための一つの手段として活用し、よりよい学びの場を提供できるよう、自身の知識・技術向上に努めていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 気づく力

児童との関わりを通して、より広い視野をもち、気づく力が身に付いた。登校時の朝の挨拶では、児童の表情から小さな変化に気づき、声をかけたり、気づきを行動に移すことができた。また、普段の授業の様子や児童の様子を観察して気づいたことを、授業準備に活かしたり、気づきを基に多角的に考えることができた。そして、指示や発問の意図を考えながら授業観察をしたことにより、より多くの工夫や手立てを吸収することができた。

(2) つぶやきを拾う力

第６学年、第２学年での体験授業・研究授業を通して、児童のつぶやきに耳を傾けるという意識から、つぶやきを拾う力が成長した。以前は、つぶやきを拾う余裕がなかったが、つぶやきを拾うことで、児童の思考に合わせた授業が展開できることに気付くことができた。また、つぶやきを拾い、授業に反映させることも、児童が主体的に学びに向かうきっかけになるということも実感した。今後は、つぶやきを取捨選択する力、そして、児童の想像力豊かなつぶやきを楽しむことを意識し、授業力向上に努めたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、教員の仕事の多忙さも知ったが、児童の成長を間近で見るこができる教職の魅力ややりがいを感じ、教師になるという思いがより一層強くなった。子どもたちを送り出す社会を見据え、どのような力が必要になるか、そして、力をつける為にどのような取り組みを行っていくのかを考え、授業づくりや指導を行っていきたい。また、子どもたちの豊かな想像力にふれながら、成長を共に喜び、自身も成長し学び続ける教師になりたい。

(2) 今後の課題

今後の課題については、授業力の向上だ。今回の演習テーマである「主体的に学びに向かう発問・導入について」の研究を今後も続け、授業力の向上に努めたい。また、児童のつぶやきを取捨選択し、児童の声で、児童主体の授業をつくりあげることを意識し、今後の課題に向き合っていきたい。また、児童の想像力豊かなつぶやきや発言を、楽しむことができるよう、授業力を伸ばしていきたい。

第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「学級担任の児童へのかかわりとその効果」

受講生氏名：森兼　陽向

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は教師力養成講座を受講する以前に、教員養成サポートセミナーにおいて演習校で学ばせていただいていた。学級担任は 30 人ほどの児童を一人で担任し学級経営していく一方、一人ひとりに適した指導も行っている。指導の個別化と学びの個性化が求められている中で、どのように学級全体への指導と両立していけばよいか関心をもつようになった。学級担任が行う個別指導と全体指導の様子を観察することで、自分が教員になった際に、相互を関わらせながらより良く児童の資質・能力を育むとともに、児童集団としての成長を促すことができると考え、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業における全体指導と個別指導（配慮や工夫）を観察する。

イ　授業外の時間での児童への学級担任のかかわりを観察する。

ウ　授業実践を通して児童と関わり、担任に向ける視線との違いを感じる。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期の演習では、次の学年を見据えて学級経営及び個人指導を行っていく様子を観察した。特に学習のまとめを行う授業において、学習に向かいにくい児童へのかかわりを中心に観察した。後半の演習では、学級開きを行う中で何を意識して児童及び児童集団と関わっているのかについて観察した。学級担任が個別指導と全体指導を行う場面や内容、さらにはその効果に着目した。また、学習に向かいにくい児童に対する学級担任の関わり方や意識を確認した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　ほめることを中心にした関わり

個人指導と全体指導どちらにおいても、意識的に児童を褒めることが行われていた。個人指導において、活動意欲が低いや学力の低い児童には、成長した部分や少しでも努力している部分を見つけ、学習を続けられるようにしていた。意欲や能力の面で、将来を見据えた対応を学んだ

全体指導では、するべきことをできている児童を褒めることで、他の児童が気づき、自主的に取り組む姿勢を育んでいた。頑張っている児童が肯定されると同時に、児童同士の自治を促していた。悪い部分を直すのではなく、より良く伸ばす意識の大切さを学んだ。

イ　学習困難児への思い

学級担任が学習に向かいにくい児童や不登校の児童を諦めない姿勢が大切だと学んだ。他の児童と同じように動いたり学びを積み上げていくことが難しかったりする児童には、その困難さや課題に目が向きやすい。その困難さを意識しながらも、できる部分や得意なことと絡めてどう解決していくのかを常に考えていく必要がある。学級担任が児童それぞれと向き合うことで、児童の課題を解決しようとする姿勢を育むことができると考えた。配属学級の担任教員が言っていた、「しない」状態が続き何かに取り組みたいと思っても「できない」状態にならないように、今頑張れることは「させる」という言葉が印象に残っている。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

(1) 学校教育の目指す姿や理念に関する知識

より良い児童の資質・能力を育み、将来を切り拓いていけるように教育理念は存在しており、一見違う内容でも、相補関係にあるのだと学んだ。新型コロナウイルスの流行等、社会が大きく変化している中で、何がどのように変化したのかを捉えることの重要性を感じた。京都府が目指す児童の姿と、そのために必要な教員の能力について、知ることができた。特に、演習テーマに関わる学びとして、個別最適な学びに関する内容が大きな学びとなった。個別最適な学びには指導の個別化と学びの個性化の２種類あり、それぞれ場面に合わせて行うことが必要だと知った。学習の到達点すら児童によって変化させることが必要であるという言葉は衝撃だったが、その可能性を獲得することができたのは大きな学びだった。

(2) 授業実践を工夫する観点の拡大

授業実践を行う際、児童主体の授業を目指したいと考えている。他の児童の見方・考え方を知ることで、より深くより多様な考えができるようになると思う。「夢・未来」講座では、そのような児童主体の授業のための工夫をたくさん知ることができた。特に、ICT 機器の積極的な活用が促される中で、それをどう扱うべきか考えた。ICT の活用は必要不可欠であるが、それによって児童がどう学び、どう変化したのか評価する視点が大切であると考えた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 個別支援のために学級全体を整える考えの獲得

演習の中で､学習に向かいにくい児童に対して周囲が支えようとする雰囲気を感じた。児童個人に対して直接働きかけるだけでなく、学級全体としてどのような姿を目指すのか共有することの大切さを感じた。困難さを抱える児童に対してフォローしてくれた児童を褒めることで、周りに気づき関わろうとする児童が増えていくことを感じた。

(2) 児童を諦めない姿勢

様々な児童とかかわる中で、児童は私が思っていたよりも様々なことを考えており、努力しているのだと感じた。できていることや頑張っていることを褒めることを通して、児童の良さを発見しようと考えることができた。児童に肯定的な思いを伝えるようにすることで、信頼関係を築こうと努力する姿勢を身に付けることができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

私は教師力養成講座に参加したことで、より教員になりたいという気持ちが強くなった。公立学校には学習や家庭環境に困難のある子が多く、学級の中で孤立したり学校に通いにくさを感じたりしている状況があることを知った。そんな児童に対して、学級担任として学校の楽しさを教え、将来をより良く生きていく力を育む教員になりたいと強く思う。児童

一人ひとりの力を信じ、個々の力を高めることができるよう、私も学び続けることができる教員を目指す。

(2) 今後の課題

授業力である。様々な個性や特徴のある児童がともに学び、考えを深めていくことができるよう、授業づくりを頑張っていきたい。演習での授業実践の反省から、授業技術に関する書籍をたくさん読むことに取り組んでいる。協働的な学びの活かし方に着目しながら、児童にとって学びの必然性があり、学びたいと感じることができるような授業ができるように学んでいく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童一人一人が自分の個性を最大限活かせる学級経営について」

受講生氏名：六島　新菜

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、教師力養成講座を受講する以前に教育実習や学校ボランティアで教育現場に行かせていただくことが多かった。その中で、様々な特性のある児童や背景・事情を抱える児童と関わる機会があった。授業に集中できず座ることも難しい児童や、言葉がうまく話せず手が出てしまい友人関係がうまくいかない児童などがいたが、どの児童にも個性があり、その児童だからこその魅力を感じた。実際に教員になってから担任をもったり、児童と関わったりする中で、たくさんの魅力や個性をもった児童と出会うことになる。そこで、児童一人一人の個性や魅力を最大限引き出すためには日頃の学級経営でどのようなことを行い、児童とどのように関わっていくのかを考えていく必要があると考えたため、テーマとして設定した。

(2) 研究方法

ア　学級での担任の児童への接し方や指導を観察
イ　児童理解のため、私自身が児童一人一人と関わる
ウ　児童一人一人に合わせた支援と個性を活かした授業実践
エ　担任の先生への質問

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

私は、児童と関わる上で貢献を引き出すことを大切にしていた。児童は自分のよさやしたよいことをたくさんアピールしてくれる。それを「えらいね」だけではなく「〇〇さんが△△をしてくれるからみんなが快適に過ごせるね」などと学級のみんなのためになる行動を見つけ、みんなの前で取り上げたりした。毎日の生活の中で児童は多くの時間を学校の中でも学級で過ごすことになる。そのため、児童が自ら行動し、自分のよさを発揮するためには、まずは自分を受け入れてもらえているという安心感が必要である。その安心感を与えるためには、教員はこれらの行動の積み重ねを大切にしていく必要があると感じた。

(2) 演習校で学んだこと

学級経営において、児童のやる気を引き出す仕掛けが個性を引き出すことに繋がると学んだ。やる気を引き出す仕掛けとして、足場的支援を行うことと児童に成功体験を積ませることが重要であると考える。まず始めに足場的支援であるが、足場的支援を行うことで児童はやり方を理解することができる。朝、教室に入ったらどんな手順で何をするのか、各教科の授業で今日はどのようなことを学習するのかがわかるように掲示物や板書で示しておくことで、児童が不安から適応できなくなるということがなくなる。

次に、児童に成功体験を積ませることである。児童は取り組んだことの結果の多くが思うものでなかったり、失敗したりしたものであれば、自信を失い、新しいことに挑戦しようと思わなくなる。そのため、小さいことでも成功体験を積み重ねることが児童にとって大切である。しかし、児童と話していると成功体験よりも失敗体験の方が記憶に残りやすいため、成功を目に見えるようにしておくという工夫が必要であると学んだ。ただ、失敗するという経験も宝物になる。そのため、失敗を宝物と感じ、失敗を乗り越える力も育てられるようにしたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

(1) 京都府の教育が大切にしている基本理念を実現するための教育

これまで聞いたことがある言葉や教育に携わる者が大切にすべき教育に関する理念などに関する知識である。それとともに、それらは全て独立しているのではなく、互いに相補していることを学んだ。生徒指導、学級経営などがすべて繋がっているようにそれぞれの法規なども関係し合っている。その法規や言葉がどのような意味であるかを確認しておくことも大切であるが、それがあることで何がどのように変わり児童にどういう効果が得られるのかまで深く考えることで、自分自身の実践にもつなげていくことができると思った。

(2) 自分に求められる力

これから教員になる上で、自分に求められている力を学ぶことができた。令和の日本型学校教育、特別支援教育など「夢・未来」講座でテーマにされていたことは全て自分が知っておかなければならず、実践できる必要があると感じた。自分が学習した、知っている、と思っていることでも時代は変化し、児童に求められる力が変化していくように教師に求められる力も変化していく。主に、ICTの活用は私たちが小学生だった時と大きく変わったことである。ICTがまるで文房具のように使えるようにならなければならない時代で、自分の経験や知識がない分、実践を通して試行錯誤し考え続けていかなければならないことを学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) その児童を伸ばす力を身につけた

これまで、児童が困っていたら一緒に取り組む、隣で教えるということをしてきたがそれだけでは児童が自立できないことに気付いた。将来、社会に出た時に私がいなくても児童が自立して自分で考えていくためには、児童ができることをできなくしてしまう指導だけは絶対してはいけないと感じた。教員が何もかも説明して教えてしまうのではなく、児童ができることは児童にやらせることを徹底して支援していくことを学んだ。

(2) 授業力が成長した

これまで指導案を丁寧に書きすぎてしまい、自分の授業が指導案と比較してどうなのかこだわってしまい、目の前の児童を意識した授業とは程遠かった。しかし、この教師力養成講座を通して、目の前の児童を一番に考えることの大切さを知った。目の前の児童が学ぶ必然性を感じながら、身の回りの生活と結びつけ、主体的・対話的に学べるようにはどうすればいいのかを常に考えながら授業をする力がついた。授業の回数を重ねるごとに児童の発言に対する切り返しや指導案での予定の変更などが臨機応変にできるようになり、目の前の児童と一緒に授業をつくることができるようになった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

私は教職実践演習に参加したことで、より教員になりたいという気持ちが強くなった。目の前の児童が学ぶ必然性を感じながら、思わず「考えたい」と思える授業をつくることが大切であると思った。しかし、私たちが小学生だった時と学び方がずいぶん異なっていたため、ICTの活用は今後の課題であるといえる。児童に求められる資質・能力を身につけさせるための手段や手法というものを学び、今後も学校現場に出向き実践力を高めていく。

最後に、私は児童の成長に寄り添い、成長した時には児童と一緒に喜べる教員になりたい。児童は毎日変わった姿や成長した姿を見せてくれる。その一瞬、一瞬に携われるのは教員の魅力でありやりがいだと感じる。私は、とある児童の「先生がこの学校に来るのを待ってるよ」という言葉が忘れられない。私のことを必要としてくれる児童の力になりたいと思う。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「信頼関係を築く児童との関わり」

受講生氏名：中島　咲里

、

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 信頼関係を築く児童との関わり

児童と信頼関係を築くことは、授業面・指導面・学級経営面のすべてにおいて大切であり、信頼関係が基盤となっていると考える。そこで私は本研究テーマを設定し、児童との距離感を大切にしながらも信頼関係を築いていくための授業づくりや学級経営を学び、信頼する教員がいることで児童が安心した学校生活が送れるようにしたいと考えた。

(2) 研究方法

ア　児童一人一人と積極的に関わり、児童理解を深める。

イ　様々な場面での児童と先生方の関わり方を観察

ウ　疑問に思ったことを先生方に聞いて学んだことを実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期は４年生、後期は３年生に入らせていただき、演習では児童と積極的に関わることを心掛けた。授業中には、机間指導から児童の苦手なことや得意なことを学習面での児童理解をするよう努めた。休み時間にはたくさん話をしたり遊んだりすることで、授業以外の児童の一面を知ることで児童理解を行った。先生方の様々な面での児童との関わり方や言葉がけを観察し、放課後にはその行動がどのようなことを意図していたかを先生方に聞くことで学びを深めた。

また、様々な会議に参加させていただいた。担任と児童との関わりだけでなく、学年会議や教職員全体の会議で児童の実態や関わり方を共有していた。様々な視点から配慮することとチーム学校で教育を進めることの大切さを学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

ア　児童理解

児童との信頼関係を築くために一番大切なことは児童理解を行うことであると学んだ。学級全体でのルールを決めたうえで、支援が必要な児童にはさらに個々の約束を決めて机の上に貼る取組をされていた。様々な面から児童一人一人をしっかり理解し、児童の個性に合わせた支援が行われていた。児童を理解することで「先生は自分のことをわかってくれる」と児童は感じることができる。児童理解をすることは、学級経営や授業づくりにもかかわる大切なことであり、たくさん児童と関わりなるべく早く正確に児童理解をすることが大切だと考える。

イ　児童との関わり方

学校生活を送る中で児童が何か嫌な思いをしたり、喧嘩になったり、問題が起こった時に先生に助けを求めたりする場面がある。その中で大切だと学んだことは、事実確認をするために周りにいた児童や関わっている児童一人一人に聞いたうえで、児童の考えや思いを理解することである。そして、何がいけなかったのかを自分たちで考えさせて反省すること、謝る素直さにも気づかせて児童同士の関係も築いていきたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、様々な講師の方から貴重なお話を聴き、教師になるうえで大切なことを学んだ。グループディスカッションや集団討論では、同じ夢を目指す仲間の様々な視点や考え方を知り、新たな学びを発見することができた。

その中で最も印象に残っているのは、第７回の「小学校における外国語活動」である。私は、小学校の頃から今まで英語が苦手で、外国語の授業を行うことに不安があった。この講座を通して教師の授業の工夫によって児童の苦手意識がなくなるということが分かった。「子どもの興味を引き出す授業を作る」ということだ。授業の中でゲームを取り入れることで、児童が楽しく興味がもてるような授業を行っていく。ゲーム感覚で行うことで勉強の苦手意識を改善していき、勉強が苦手な人でも授業に積極的に参加したくなるように児童の興味を引き出していく。興味を引き出す授業を行い、児童が誰１人の取り残されない授業を実践していきたい。また、「人は褒められた方向にのびていく」という言葉が心に残った。児童のいいところにたくさん気づいてさまざまな方向から褒めることで児童自身が向上していくような成長の仕方ができるようにしていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 身に付けた力→気づく力

私は、児童理解のために児童とたくさん関わることで、児童の変化や成長に気づくことができた。そして、その変化に気づいて児童に寄り添った声かけを行ったり、児童の良さやできるようになったことを褒めながら伝えたりすることで、一緒に喜ぶことができた。また、先生の児童への関わり方を観察することで関わり方の工夫に気づいたり、担任の先生の行動を先読みしたりして行動することが出来た。

(2) 成長したこと→児童理解を生かした児童との関わり方

児童理解をしっかり行なった上で、それぞれの児童にどのような支援が必要か考えて実践することができた。発表が苦手な児童へ机間指導で声掛けをして、児童が発表したいと思えるよう工夫ができた。最後には、児童が「先生のおかげで発表ができた。この意見いいねと褒めてくれたのが嬉しかった」と児童が一歩踏み出すために背中を押してあげることができた。児童の成長と共に自分も教員として成長できるということを感じた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

私は「夢・未来」講座や教育実践演習を通して、児童と一緒に成長したり、一緒に喜べたりする教師の仕事により一層京都府の教員になりたいという想いが強くなった。児童との関わりや授業だけでなく、年度末や年度初めの仕事について知ることもできた。会議やこれからの学級経営をどうしていくか考える教師の裏の仕事の大切さも学ぶことができた。児童一人一人を理解して、児童の変化に気づき、児童に寄り添う教員になっていく。

(2) 今後の課題

授業力の中で、児童のつぶやきを拾って児童の意見から学びを広げることについて課題が残った。児童の大切な気づきを見逃さないように広い視野と聞く耳を持って授業に臨んでいきたい。教師力養成講座で身につけた、「気づく力」と「児童理解を生かした児童との関わり方」を生かしながら、自身の授業力向上のために学ぶ姿勢を持ち続けていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の考えを引き出す発問の工夫」

受講生氏名：赤松　佑唯

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1)　演習テーマの設定理由

児童主体の授業を行うには、児童の意見が必要であり、それを引き出す教師の発問が重要であると考えた。分かりやすく、考えやすいような発問はどのようなものなのか、正解を求めすぎない発問の仕方はどうすればいいのか、考えを深める・広げるにはどうしたらいいのかなど、児童中心となった授業が展開したいと思ったからである。

また、児童が「考えたい！」「知りたい！」「分かりたい！」と意欲的に授業に向かい、「勉強は楽しい」と思わせることができるような発問の工夫を追求したいと考え、これを研究テーマに設定した。

(2)　研究方法

ア　配属学級の担任の先生の授業での発問の内容や仕方を観察し、工夫されている点について学ぶ。

イ　体験授業、研究授業を通して実践し、児童の反応を見る。

ウ　体験授業、研究授業の振り返りで児童の考えを引き出せていたか振り返る。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1)　演習テーマに関わる実践内容

前半は４年生、後半は２年生に入らせていただいた。それぞれの担任の先生方がどのような発問をしているのかに注目し、それに児童はどのような反応をしているのかを観察した。

体験授業２回、研究授業１回の授業実践では、学年に合わせて発問内容や言い回しに気をつけることや発問を黒板にも提示するなどして視覚でも情報を得られるようにすることを実践した。また、発問が全体に伝わるように、発問に至るまでの授業の雰囲気作りも大切にした。日頃から児童たちとコミュニケーションをとることで、授業に意欲的になれるような関係性を作ることにも意識して取り組んだ。

(2)　演習校で学んだこと

ア　補助発問の大切さ

主発問で大まかに内容を捉えるために児童に問うが、その児童の答えに対して、「なぜそう思ったの？」「それはどういうこと？」と補助発問を噛み砕いて行うことで、より深く詳しく児童の意見を引き出せるのだと学ぶことができ、主発問だけでなく、補助発問の大切さにも気がつくことができた。

イ　児童との信頼関係

入らせていただいた学級のどちらも児童と担任の先生との関係がよく、だからこそ授業でも意欲的に参加する児童が多いのだと感じた。この先生ならしっかり話を聞いてくれそうという安心感を与えることで、間違いを恐れることなく、児童が自由に発言できるのだと感じることができた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、大学では学べない、京都府の教育についてや、京都府の教員に必要な資質・能力についてなど、様々な角度から、今後に生かしていけるような大切なことをたくさん学ぶことができた。

特に印象に残っている講義としては、第８回の「特別の教科道徳」の講義である。私の演習テーマである発問の仕方や補助発問の有効性についてであったり、発問した後、返ってきた児童の反応の対応や広げ方についてであったり、大いに学ぶことができた。実際に模擬授業のような形で授業を受けてみて、ここまで意見を広げることができるのだと驚いた。私自身、発問に対する答えを考えがちで、その考えを求めてしまうような癖があったのだが、その答えを用意していなくても、考えを引き出すことができるのだと実感することができた。

他の講座でも、グループ活動が多数あり、同じ仲間と意見を交流することができ、今後の教育観を固めていくきっかけにもすることができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

体験授業と研究授業を通して、授業の作り方や、進め方を身につけることができたと感じている。また、先生方にアドバイスをいただき、どうすれば児童をひきつけることができ、意見を引き出せるのかについて学ぶことができた。ただ教科書の内容を順番に進めるだけでなく、自分らしさや児童にあわせた展開の仕方や発問の仕方がとても重要であり、それが、児童にとっての意欲にもつながると実感した。実践してみることで、そういった授業力を身につけることができたと感じている。

(2) コミュニケーション能力

担当の学年だけでなく、他学年との交流も積極的に行ったことで、コミュニケーション能力の成長につながった。低学年と高学年では、話し方やスピード、内容の伝え方を変えるということの重要性も学ぶことができた。話し方に柔らかさがあると、児童も心を開きやすいということに気づき、実践し、自分なりの児童とのコミュニケーションの取り方を身につけることができたと感じている。

先生方とのコミュニケーションも積極的に取れるよう努力した。話を重ねるごとに、お互いに緊張がとれ、児童の実態の把握や先生との教育に対する考え方の共有など、講義だけでは学べないことも学ぶことができた。４ヶ月の間に自分から積極的に話しかけるというコミュニケーション能力が身についたと実感している。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、京都府で教員をしたいという思いがより一層強くなった。演習校の先生方や「夢・未来」講座をしてくださった講師の先生方は教育に対して素敵な考えを持っておられる先生ばかりで、私もそのような先生方と一緒に教員として働きたいと強く感じた。自分自身の教育に対する考えをしっかりと持ち、教職に取り組んでいきたい。

(2) 今後の課題

体験授業や研究授業でICTの活用をすることができなかった。タブレットやテレビモニターを使うことで、児童の学びに対する意欲や学びの充実を図ることができるのは間違いない。今後は、ICTを１つの手段として、積極的に取り入れていくことが課題であると考える。そのためには、まずは、自分がICTの可能性について学ばなければいけない。有効的にICTを活用し、自分らしさを忘れずに授業展開できるようにしたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の発言を生かす授業づくり」

受講生氏名：坂根　日那子

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教育実習で授業を行う中で、児童が発言する機会が少ないという課題が挙げられた。教師が一方的に教える授業では、児童の学習意欲を高めることはできない。児童がより主体的に、意欲をもって学習に取り組めるような授業を展開していくためには、児童の発言を生かしていくことが必要である。そこで、授業の中でどのように児童の発言を引き出し、取り入れていけばよいのかを学びたいと思い、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　担任の先生の授業において発問や声かけを観察する。

イ　担任の先生の発問や声掛けに対する児童の反応や表情を観察する。

ウ　授業実践を通して、自分の授業について考察する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマにかかわる実践内容

前期には第２学年、後期には第５学年の学級に入らせていただいた。それぞれの学級で担任の先生だけでなく他の学級の先生の授業、養成講座生の授業を見学し、先生の発問や声掛けとそれに対する児童の反応を観察した。授業中だけでなく、休み時間等の児童の様子も観察し、児童理解に努めた。そして、それらを生かして授業実践を行い、自分の授業の考察や先生方からの助言をもとに改善点を明確にし、授業改善に努めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　授業について

児童の発言を生かす授業づくりの工夫として、二つのことを学んだ。一つ目は、児童が発言しやすい環境を作ることである。全体で意見を交流するときには事前にペアワークやグループワークを取り入れ、自分の意見に自信を持たせることが必要である。二つ目は、一対一にならないための工夫である。児童の考えに対して同じ考えを持つ他の児童に、なぜそう思ったのか発言させたり、具体的な例を挙げさせたりすることで、より多くの児童の発言を生かした授業を展開できるよう意識した。今後も、児童が発言しやすい環境づくりや、児童の意見を広げ、深められる授業を展開できるようにしていきたい。

イ　児童理解について

児童の発言を生かすためには、十分な児童理解をもとに授業づくりを行うことが重要であるということを学んだ。前期の授業実践では、道徳科の同じ教材の授業を２つの学級で行った。１回目は、自分が入らせていただいている学級での授業だったため、発言をよくする児童や支援を必要とする児童について十分把握し、個別支援を行うことができた。しかし、２回目は、異なる学級での授業であったため、児童とかかわる時間が不十分であり、机間指導の際に支援を必要としている児童を把握できておらず、困惑する場面があった。日々の児童との関わりの時間を大切にし、児童理解を十分にしたうえで授業づくりを行い、適切な指導や支援ができるようにしていきたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教員に必要な資質・能力や、実践に生かすことができる知識・技能を学ぶことができた。また、同じ京都府の教員を目指す学生と校種をまたいで交流することで、新たな視点や考え方にも触れることができた。「夢・未来」講座での学びによって、演習校での実践をより学びの深いものにすることができた。

その中でも、最も印象に残っているのは、第８回の道徳に関する講座である。道徳科では正解がないため自分の意見を発言することをためらうことがある。そのため、だれもが発言しやすい雰囲気を作ることが大切だと学んだ。導入の初めの発問をだれでも答えやすい簡単なものに設定する、質問や発問する際も児童の前に立っているだけでなく児童の中に入っていき、近づいていくなどの工夫をしていくことで、意見を言いやすい雰囲気づくりをし、多様な意見が飛び交う授業を展開していけるようにしたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業について

多くの先生や養成講座生の授業を観察したことで、様々な授業の工夫について学ぶことができた。前期の道徳科の授業では、１回目の反省を生かして２回目の際はペアワークを取り入れたり、発問を変えたりして、授業がよりよくなるよう改善することができた。また、児童の意見に対してそう考えた理由や具体例を聞くなどして児童の考えを深め、授業に生かせるように意識することができた。後期では、外国語科の授業を行い、児童が楽しく学習に取り組めるよう、動作を取り入れたり、ゲームの中でも難易度を変化させたりするなどの工夫をすることができた。英語科は、自分自身の専門教科であるため、児童に身につけさせたい力や理想とする姿を具体的に想像しながら授業づくりをすることができた。これからは､英語に限らず他の教科に関しても教科特有の見方考え方について学びを深め、授業づくりができるようにしたい。

(2) 児童理解について

前期の授業実践で児童理解の重要性を強く実感したため、後期の演習では前期以上に十分な児童理解ができるよう行動し、自分の授業に生かすことができた。担任の先生の授業を見学させていただいているときにも、積極的に児童の考えを観察し、声掛けや机間指導を行った。また、宿題提出のチェックや丸付けを行うことで、児童が得意とする教科や苦手とする教科について知ることができた。今後は、日々の様子からだけでなく、児童の提出物もしっかりと観察し、授業づくりに生かしていきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、授業づくりの工夫や学級経営について学び、児童理解の重要性を改めて感じることができた。そして、児童のかけがえのない一日にかかわることができるという教員という仕事の魅力を改めて感じることができた。自分自身は教員として未熟な部分が多くあるが､今後も学生ボランティアを続け､教師力の向上に努めていきたい。

(2) 今後の課題

今回の演習を通して、授業力に課題があると感じた。児童の発言を生かすことをテーマとして演習を行ってきたが、まだ教師の説明が多くなり、児童の発言の機会を減らしているという部分があった。今後は、児童の発言に対する切り返しの質問の質を上げ、児童の考えが深まるようにしたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「取り残されない、実りある全員参加型授業」

受講生氏名：徳永　朋大

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教育実習や学生ボランティアを経験する中で、集団授業でのスピードと自身の学習スピードが合わず授業内で取り残されてしまう児童が一定数いるということを感じた。私が教員になった際、そうした児童が取り残されることなく、かつ全員が主体的に学習に参加できる授業を実践したいと思い、本演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業における個別支援の方法と、それを受けた児童の様子を観察する。

イ　授業における全員参加型授業の工夫を観察する。

ウ　授業実践を通して、自身の授業を省察し、よりよい授業を追求する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期の演習では６年生、後期の演習では２年生の学級で演習をさせていただき、授業観察と授業実践を行った。

授業観察では､個別支援を行うタイミングや行う際のポイントに注目して観察を行った。また、学年や児童の実態に応じた指示の仕方についても観察を行った。加えて、全員参加の授業を展開するための発問や活動に注目し観察を行った。

授業実践では、授業観察での学びや指導教官からいただいた助言をもとに､「取り残されない授業」と「全員参加型授業」の二観点を意識した授業づくりと実践を行った。その後、自身の授業を省察し改善に努めた。

(2) 演習校で学んだこと

授業観察では以下のことを学んだ。個別支援の工夫として、６年生では、ICTのクラウド機能を活用して支援を必要とする児童を素早く把握すること、一つの活動に一つの事柄のみを説明する「一時一事」で指示が明確に伝わることを学んだ。また、２年生では、擬音を用いて表現すること、机の上を整理するように指示することで注意力散漫が防げるということを学んだ。全員参加型授業の工夫として、６年生では、ものの大きさを表現する際にみんなで体を使い表現することで、誰でも興味・関心を持って取り組めると学んだ。２年生では､「やりたい」を強く引き出す導入が実りある45分授業を行う上で大切だと学んだ。

授業実践ではこれらの学びを踏まえ、以下のことを実践し多くの学びを得た。６年生では､ICTのクラウド機能を活用して､意見が書けていない児童に素早く気づくことが出来た。しかし、タブレットを見るばかりで児童の表情を捉えることがあまりできなかったため、まずは児童の表情を捉えることをすべきと学んだ。２年生では、教具を用いて児童の「やりたい」を引き出しつつ、なぜこの活動をするのかという趣旨を共有したことで、全ての児童が前向きに学習に取り組めていた。しかし、教具の数が少なく取り合いになったり、一人当たりの活動時間が短くなったりしたため、活動に応じて教具の数を調整する必要があると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

本演習テーマとの関連性が高く、特に印象的であった２つの講座について記述する。

(1) 小学校における児童理解と学級経営

学級経営の充実を図るには、児童理解が大切である。そして、児童理解のためには教師と児童とのつながりだけでなく、児童同士のつながり、教師と保護者のつながりも大切であることを学んだ。こうした多くのつながりが深まることで、児童一人一人の個性や人間関係を把握でき、本演習テーマの授業実践に生かされると考えた。それぞれのつながりを構築するための方法についても多く学ぶことが出来たため、実践していきたい。

(2) 模擬授業

模擬授業を体験する中で、個別支援の方法について学ぶことが出来た。全体で活動の指示をした後、先生が「わからない子は前に来てね」と招集し、活動に取り残されそうになっていた子を多く救っていた。それだけではなく、前に行かなかった子にも机間指導をすることで、誰一人として取り残さない徹底された支援の仕方を学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 子どもに伝える力

演習が始まったころ、私の喋り方には優しさがあるものの、トーンが単調で子どもに伝える力が不足していると感じていた。教員にとって必要な「伝える力」を養うために、演習先の先生方や養成講座生､｢夢･未来｣講座でご講演されていた先生方の話し方を観察し、実践していった。その結果、教壇では大げさに演じること、間を使うこと、子どもの行動や発言の背後にあるものまで理解しようとして、その理解をもとに伝えることなど、あらゆる方法を得ることができた。これからも「伝える力」にさらに磨きをかけていきたい。

(2) つながる力

これまでの教育実習や学生ボランティアでは、児童とのつながりを持つ機会が多かったが、本実習では保護者や先生方と密につながることが出来た。特に保護者とのつながりに関しては、不登校児童の保護者とお話をする機会があり、保護者の思いを聞いたり、楽しくお話をしたりすることが出来た。また、保護者懇談会にも参加する機会があり、保護者に安心してもらうには、どのような表情で、どのような内容を話すべきかについても吸収することが出来た。そういった児童以外とのつながり方を学ぶことが出来たことは、養成講座でしか得られない学びであり大変有意義なものとなった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

養成講座に参加したことで、児童たちとの関わりだけでなく、保護者とお話をしたり、先生方と協力して仕事をしたりする経験を積むことが出来た。これらの経験を通して、教員という職業の難しさと同時にたくさんの魅力を実感することが出来た。今回得た多くの学びを土台として、たくさんのつながりの中で、学び・成長し続ける教員になる決意だ。

(2) 今後の課題

学校生活の中で最も時間を費やすものが授業である。授業力を高めていくために、今後も本演習テーマに沿った授業を追求していく。また、演習の中での課題であった、児童のつぶやきから学習目標を組み立てる授業展開を行っていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「学級で児童一人一人が居場所を感じられる学級づくり」

受講生氏名：鶴丸　優月

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

学校生活の大半を過ごす学級は児童にとって安心できる居場所でなければならない。学級で児童一人一人が安心して過ごすためには、教師の学級経営が肝心になると考える。先生方がどのような考えや工夫を持ち学級経営をされているのか学びたいと思い、本研究を設定した。

(2) 研修方法

ア　授業内や日常生活での学級担任と児童の関わりを観察する。

イ　学級担任の関わりの様子から学んだことを実践する。

ウ　積極的に児童と関わり、一人一人の良さを知り児童理解に努める。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は５年生、後期は４年生の学級で演習を行った。最高学年に向けて学級をまとめる姿や、３年生から４年生になり上級生になった自覚を持たせるような学級開きの様子を観察した。また、授業中や休み時間の様子の他、６年生を送る会、卒業式、入学式、春の遠足などの各行事からも児童とどのように関わっておられるのか観察した。さらに、児童との関わりについて疑問に思ったことを質問し、教えていただいたことを実践することで学びを深めた。積極的に児童と関わり、良さを見つけ伝えることで児童とコミュニケーションをとり、一人一人の児童理解に努めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　授業について

教師対発言している児童の一対一になるのではなく、一人の児童から出た意見を全体に共有し、自分事として考えさせることが大切であると学んだ。例えば、道徳の授業では様々な考えを持つのはあたり前のことであり、出てきた意見を「みんなはどう思うか」問いかけ共有することで、自分の考えへと変わり、より深く考えることができる。また、発言した児童も安心することができる。これは、道徳の他でも全員参加型の授業にするために必要なことであると考えるため、どのような授業でも出てきた意見を共有し児童が考える時間をつくっていきたい。

イ　学級づくりについて

児童の良いところを見つけ名前を呼び伝えることで、児童と良いコミュニケーションがとれることを学んだ。学級では、担任が些細なことでも児童の変化に気がつき、それをすぐに児童に伝えている姿を何度も見た。褒められた児童は笑顔になり、担任の周りにはいつも児童が多く集まっていた。変化に気が付くというのは、普段から児童をよく見ていなければ分からないことである為、児童理解が学級づくりに大きく影響していることが分かった。

また、学級開きの際、特別な配慮が必要な児童について、そのほかの児童の理解が得られるように丁寧に伝えておられたことも印象的であり、誰もが安心して過ごせる学級をつくっていくことが大切であると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の目指す教育や教員に求められる資質・能力、今後自分の実践に活かしていきたことを様々な先生方から学ぶことができた。また、集団討論では様々な校種の演習生と交流することで、新たな考えや価値観を得ることができた。

特に印象に残っている講義は、「京都府における人権教育」の講義である。京都府がどのような思いで人権教育に力を注いできたのか学び、それが京都府の教育の基本理念と強く結びついていることが分かった。また、人権教育はあらゆる教育活動の基盤であることを知り、人権問題を取り扱った授業のみが人権教育ではないことを理解することができた。教員として一人一人が安心して過ごせる学校・教室になるよう環境づくりを行っていく。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 様々な活動に参加して

教師力養成講座では、授業の他に「保護者懇親会」「六年生を送る会」「卒業式・入学式」「一日仮担任」「一年生を迎える会」「春の遠足」「様々な職員会議」などに関わらせていただき、イメージをつかむことができた。それぞれの活動にねらい・目的があることや、行事を通して児童の成長を間近で感じることができた。各行事の準備は忙しく大変だったが、先生方・児童が行事成功に向け団結している姿を見ることができ、どのような思いで取り組んでいるのか感じることができた。また、一日仮担任を任せていただく日があり、その日は朝から児童の前に立ち健康観察や朝の会、帰りの会などを経験した。その経験から担任のイメージをしっかり持つことができ、大きな自信に繋がった。

(2) つながる力

演習を通して多くの先生方、児童、保護者、地域の方々、演習生などと関わることができた。初対面の相手と話すことはいつでも緊張するが、明るく笑顔でいることが大切だと学んだ。保護者懇親会では何人かの保護者の方と話す機会があり、その中の参加されていた保護者の方と入学式で再開し、「先生、お久しぶりです！」と声をかけて下さった時は本当にうれしかった。また、年度が替わり、違う学級に配属されてからも、前学級の児童が話に来てくれたり、すれ違っても笑顔であいさつをしてくれたりした。今後も、これまでの出会いやこれからの出会い、つながりを大切に、様々な人々と関わり、多くの人から信頼される教員を目指す。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

京都府「教師力養成講座」を通して、教員になりたいという思いがより強くなった。演習校の先生方、多くの児童、保護者の方々と関わる中で教員として自分の意識が高まっていった。児童が短期間で心身ともに成長する姿に喜びを感じたり、常に児童の為を思い行動したりされている先生方の姿を見て、教職は忙しく大変なことも多いが魅力的な職だと再確認できた。養成講座で学んだ経験を活かし、常に学び続ける姿勢を大切にする。そして、互いを尊重し合い、児童一人一人が居場所を感じられるような学級をつくっていく。

(2) 今後の課題

今後の課題は、授業力を高めることである。授業内での発問の仕方や、机間指導、板書、児童の意見をよく聞くこと、説明を分かりやすく端的にすることなど、課題が山積みである。また、ねらいに沿った授業づくりや、導入の工夫、個々の児童理解なども大切にしなければならない。何より、身近なものを紹介するなどの工夫をし、児童が前向きに楽しく学習に取り組めるような授業づくりを目指したい。今後、ボランティアを通して、先生方の発問の仕方や個別支援の仕方をよく観察し、授業力を向上させていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童一人一人が安心して過ごせる学級づくり」

受講生氏名：和泉　穂香

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

このテーマを設定した理由は、これまでに教育実習やスクールサポーターで学習や人間関係などに不安に思っている児童が多いと実感したからである。学級は、児童が学校生活において大半の時間を過ごす場所であり、生活のベースである。そのため、児童一人一人が安心して過ごせる居場所にしたい。そうすることで、児童一人一人の個性のよさ、可能性を伸ばすことができ、児童一人一人の成長につながる。そこで、担任の先生方がどのような関わり方をしているのか、児童一人一人が安心して過ごせる学級づくりのための方策について研究したいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　児童一人一人に対する担任の声掛けや工夫を観察する。

イ　積極的に児童と関わり、児童理解を深める。

ウ　観察で気付いたことを児童との関りや体験授業、研究授業で実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期演習では第２学年、後期演習では第６学年の学級に入らせていただき、学校生活や授業での担任と児童との関わり方の観察を行った。そこで、児童一人一人が安心して過ごせる学級をつくるためには、まずは児童理解が重要であることを学んだ。そのため、休み時間や放課後などに児童の行動や誰とどのような遊びをしているのか、どのような表情をしているのかなどに着目しながら積極的にコミュニケーションを取るよう意識した。また、観察するだけでなく、担任から児童の様子を伺いながら、児童のことを理解した上で児童に適した声掛けや発問の工夫をするなど多くのことを意識して授業実践をした。

(2) 演習校で学んだこと

ア　学級経営について

学級全体でのルールを全員が共通理解しておくことが重要であることを学んだ。学級開きから「こんな学級にしたい」「こんな学級は嫌だ」ということを一人一人が模造紙に記入し、誰もが嫌な思いをしないようにと徹底されていた。担任がルールを全て決めるのではなく、担任の思いや考えがあり、その範囲内で児童の意見を尊重し、学級全員が納得し決めていることもあった。児童自身が「自分たちで決めたことは自分たちで守っていこう」という思いをもたせ、自主的に活動させるために様々なことを仕組まれていることを学んだ。この仕組みこそが「安心して過ごせる学級づくり」には欠かせないことだと実感した。加えて、日々の指導の徹底ということも重要であることを学んだ。

イ　授業について

児童が安心して過ごすためには､「わかる授業」をすることが重要であることを学んだ。発問はもちろん児童の実態に合わせて具体物やICTを使うことで、具体的なイメージをもちやすくなり、児童にとっても分かりやすくなり、授業が楽しくなる。授業が分かれば、学校も楽しくなり、安心して過すことができる。そのため、児童一人一人が安心して過ごせる学級をつくるためにも、「わかる授業」をしなければならないことを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教員として積極的に取り組んでいきたいことやこれからの教員に求められている資質・能力について学ぶことができた。また、京都府の教員を目指す学生と共に、グループワークや集団討論などで交流することで、自分とは異なった視点の意見を聞くことができ、視野を広げながら考えることができた。

特に、印象に残っている講座は、第８回「特別の教科　道徳」の講義である。道徳は、児童の心を見ることが基本とされており、そのためには、意見を出しやすい雰囲気づくりが重要であると学んだ。また、担任が児童に道徳を教えるだけではなく、教員も豊かな人間性を身につけるために、共に考え、学んでいく重要性を学ぶことができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

児童の成長には「児童一人一人が安心して過ごせる学級」があり、その中で、「質の高い授業」をすることが必要である。そのことを意識して授業実践に臨んだ。指導案作成時では、児童の目線に立って考えることはできた。実際の授業では、時間配分がうまくいかなかったり、ねらいとまとめが合わなかったり、児童に何を身につけさせたいのかが明確になっていない授業になってしまった。事後研で、受講生の考えを聞いたり、先生方にアドバイスをいただいたり、授業を重ねるごとに改善することができた。すべての活動に同じ時間をかけるのではなく、中心となる活動に時間をかけることを学んだ。また、児童の考えを揺さぶる発問の重要性も実感することができた。これらの学びを生かして「児童一人一人が安心して過ごせる学級づくり」と共に「授業力」をさらに磨いてきたい。

(2) 気付く力

積極的に児童とコミュニケーションをとることで、児童の変化や成長に気付き声を掛けることができた。児童との関わりを通して、児童の表情、人間関係、学習の姿をよく観察した。観察することで、小さな変化にも気付くことができ、児童の成長を褒めたり、学習で困っている児童に声を掛けたり、元気がない児童に声を掛けたりと、その児童に合った対応をすることができた。また、担任が指導される場面から、児童と目線を合わせることや指導後のフォローも必要であることを学んだ。「児童一人一人が安心して過ごせる学級づくり」には、児童に寄り添っていくことが大切であり、そのためには、児童の小さな変化に気付く力が必要であり、今後経験を積んでさらに高めていきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座での演習や講座を通して、教師になりたいという思いがさらに強くなった。授業だけではなく様々な業務に携わり、教師の仕事の多忙さ、責任の大きさを実感した。実践演習では、様々な児童と出会い、たくさんの笑顔を見ることができた。この笑顔を守るためにも、一人一人が安心して過ごせる学級にするためにも毎日元気で、明るく笑顔を欠かさずに過ごし、児童に合った声掛け、指導をすることができる教員になりたい。

(2) 今後の課題

今後の課題は、授業力の向上である。「分かる授業」をするためには、児童の実態把握にあわせた発問や話し方の抑揚が大切である。授業実践では、活動が一定のペースで進んでしまい、振り返りで自分が考えていたことと違う内容になっていることがあった。「分かる授業」にするために、この授業でどのような力を身に付させたいのかを明確にして授業することが課題である。児童が安心して過ごせる学級にするためには「わかる授業」も大切である。身に付けて欲しい力を明確にして、授業力の向上に努めていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「わかりやすく考えやすい発問の工夫」

受講生氏名：服部　翔

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

授業での発問は、児童に主体的・対話的で深い学びをするために行うものである。そのため、教師は発問がよりわかりやすく、考えやすい工夫をする必要がある。これらは意識しないと気付かないことでもある。教師は、授業の中で、児童がより内容について考えられるようにしたり、学ぶ楽しさを引き出したりすることが求められる。その中でも、最も重要なのは発問であると考えこのテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　担任の授業や発問の方法等を観察する。

イ　発問を受けた子どもたちの反応等を観察する。

ウ　観察の中で気付いたことを児童と関わることや体験授業、研究授業で実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期では第５学年、後期では第４学年に入り、授業中に先生方がどのような発問をしているのかを観察した。また、発問を通して、児童がどのような反応をしているのかを観察した。そこから、より分かりやすく考えやすい発問の工夫について模索した。授業実践では、児童の興味を引く問いかけや発問ができるように意識した。また、児童がどのような反応であったのかを事後研究で考察を行った。

(2) 演習校で学んだこと

児童が理解しやすく考えやすい発問として、３つのことを学んだ。まず、１つ目は「具体的である」ことである。「このことについてどう思いますか。」という発問を行った時、児童の反応はあまりよくなかった。実際、先生方が行っている発問に着目すると、「この部分は教科書ではどのように書いていますか。」や「この川の特徴について考えましょう。」といった具体的な発問を行われていた。ここから、発問は抽象的なもので行うのではなく、より具体的に考えやすいような発問が必要である。

２つ目は、「端的である」ということである。先生が行った発問の１つで少し長文の発問があった。複数の解答を求められているものだったため、児童は混乱していた。その後、先生は発問を分けたところ、児童はしっかりと考えることができた。ここから、発問は１つずつ丁寧に分けた端的なものがより分かりやすくなっていると考えた。

３つ目は「１回で理解させる」ということである。授業実践を行った時、発問を１回のみしてから、机間指導を行った。そこで発問は何だったのかと数人に問われ、再度発問を繰り返したことがあった。ここから、１回できちんと伝える必要があると考えた。大きな声で抑揚のついた話し方で学級の全員に伝える必要がある。また、学級を見まわし、全員が聞く態勢になっているかなどを確認することも大切である。学級の様子をしっかりと見て、本当に全員に伝わっているのかを確認し、「1回で理解させる」ことが必要である。

分かりやすく考えやすい発問の工夫として「具体的で」「端的に」「１回で理解させる」という３つのことを意識して実践していきたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、学習指導要領や道徳教育、学級経営等幅広い内容について学び、教員になる上で必要な知識を身に付けるとともに、演習生との意見交流で自分自身の見識を深めることができた。特に印象的だった内容は２つある。１つ目は学級経営である。第３回「学び続ける教員のへのメッセージ講演会」での言葉が印象強く残っている。ここでは「一人一人の児童を主語にする学校をつくる」というものであった。この信念は学級経営に大きく影響があると考えた。児童に制度を合わせるのではなく、制度を児童に合わせる考えが学級をよりよいものにしていくと学んだ。児童自身に選択できるような環境づくり、学級づくりを目指していくことを学んだ。２つ目は個別最適な学びである。「夢・未来」講座を受けるまでは､机間指導を行うことや個別に対応するとこといった知識のみしかなかった｡しかし、「指導の個別化」と「学習の個性化」の２つの個別最適な学びが存在することを知った。教師をメインに置くのか、児童をメインに置くのかを明確にして個別最適な学びがあることを学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座で教師という職業について知り、より教師という職業の面白さと難しさを知った。「夢・未来」講座では、自分の知らなかった教師という職業について知ることができた。学習指導要領や道徳教育、学級経営等幅広い内容は自分の教師へのビジョンが明確になった。

演習校での実践では、発問というテーマから、授業の仕方やコミュニケーションの取り方について学んだ。複数の学級で同じ授業をさせてもらう機会があり、その中で、わかりやすい発問をするためには、授業をする学級の児童の様子をよく理解する必要があることを体感した。他の学級でした発問がわかりやすかったからといって、次もわかりやすいとは限らない。また、授業をする時間によっても、児童の様子によって耳に残る発問が変わってくる。このように、発問に着目しながら実践することを通して、学級経営との関係、児童の反応を常に考えながら授業をすることの重要性を学んだ。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座で得た知識や経験は、今後教師として働いていく上でとても大きな学びとなった。教師力養成講座に参加したことで得た知識や経験を惜しみなく発揮していき、教育に精進していきたい。テーマに設定した「わかりやすく考えやすい発問の工夫」は授業を行う上で大切なものになってくるので、教師という職業についた時も意識していこうと考える。

(2) 今後の課題

今後の課題は授業力の向上である。その中でも、今回のテーマであるわかりやすく考えやすい発問の工夫を重視する。教師になると、授業は毎日行われる。もちろん、発問も毎日行うのである。だからこそ、「具体的である」、「端的である」、「１回で理解させる」という３つの観点を大切にし、自分の中のわかりやすく、伝わりやすく、考えやすい発問ができるよう目指していこうと考える。

テーマとした「発問」について、意識的に先生方はどのように発問しているのか、児童に伝わりやすくするにはどのようにしたらよいのかを模索してきた。今後できることはボランティア等で先生方の授業をさらに深く観察したり、児童と触れ合い、児童の考えを理解する機会をつくったりすることである。「わかりやすく考えやすい発問」を追究し、授業力を高められるように常に学び続けていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「学習意欲を引き出す児童との関わり」

受講生氏名：大畑　千裕

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

この演習テーマを設定した主な理由として、自分の経験がある。元々学ぶことの意義がわからず、そのため勉強が好きではなかった。授業で学ぶことの意義や楽しさを感じることができなければ、教員の思いに応えて「がんばろう」という気持ちは生まれない。したがって、児童の学習意欲を引き出し、学校に通うことが「楽しい」、「明日もがんばろう」と感じさせるために、どのように児童と関わっていくのかを研究しようと考えた。

(2) 研究方法

ア　担任の声掛けに着目して、学級担任の授業を参観する。

イ　児童の身近な生活を意識した授業の導入のあり方を考える。

ウ　児童の実態に応じて、教材の難易度や提示の仕方などを工夫する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

授業観察では、児童の学習意欲を引き出す声掛けと導入のあり方に着目した。担任は、児童のがんばりを認め励ます声掛けを実践されていた。授業実践ではそれを意識し、児童の様子に常に気を配りながら、前向きで明るい声掛けを行った。導入では、身近な生活に関することや自分の経験などを取り入れることで学習の意義を見いださせ、児童のやる気を引き出すようにした。また分かりやすい授業にするために、既習事項を整理し、児童の理解度に合わせて発問を考えたり、教材の難易度や提示のタイミングなどを変えたりした。

(2) 演習校で学んだこと

ア　学級経営の重要さ

児童の学習意欲や学習に向かう態度は、担任の学級経営のあり方に深く関わっていると学んだ。児童の学習意欲が高い学級は、担任が児童の意見を否定せず、常に傾聴する姿勢をもっていた。また、担任が授業を一方的に進めるのではなく、児童の発言やつぶやきを生かした、児童主体の授業展開となるようにしていた。このことから、学級経営こそが授業の土台であり、児童の学習意欲を左右するのだと学んだ。

イ　視野を広くもつこと

児童の学習意欲を引き出すために、予想される児童の反応をいろいろな方向から考え、児童のつまずきに対する手立てを考えておくことが大切だと学んだ。児童が学習内容を理解できないまま授業を進めると、児童は学習に集中できず、学習意欲が下がる。そのため、教員は教えるという教員としての立場と同時に、自分が児童ならどこでつまずくかという立場をもつことが大切である。広い視野をもち、柔軟な授業展開を行うために、深い教材研究と指導内容の理解、丁寧な児童理解をこれからも心掛けていく。

ウ　資質能力としてのレジリエンス

教育現場の毎日は、多様で変化が激しい。したがって、教員は心身の健康を常に保ち、自己管理を徹底することが重要だと学んだ。心身が健康であれば、自然と仕事へのやる気も高まり、児童に対して前向きな声掛けができるようになる。また、児童と余裕をもって丁寧に接することができ、学習への意欲を高めることができると考える。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教員として必要な知識や資質能力を学ぶことができた。その中で、特に学んだことは２点ある。１つ目は、教育的愛情である。「夢・未来」講座における講師の方々は、それぞれに教育への思いや考えがあり、教育的愛情にあふれていた。そうした愛情は、教員として長年現場に立つなかで涵養されていくものだと考える。今後、児童の信頼や願い、期待に応えていくためにも、児童と積極的に関わり、教員として不易の資質能力の一つである教育的愛情を培っていきたい。２つ目は、具体的な行動として捉えることである。「夢・未来」講座におけるレポートでは、単なる講義の感想ではなく、教員として自分はどのように行動していくかを明確にすることが重要だと学んだ。教育現場では即戦力となることが求められる。即戦力となるために、レポート１つに対しても、常に現場にいる自分の姿を思い描きながら記述するよう、今後もあらゆる場面で自分を磨いていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業づくりの力

これまで授業づくりといえば、教科書や指導書、学習指導要領などを読み込み、それに沿って展開を考えるというものであった。しかし、それだけでは目の前の児童へ指導することは難しい。演習では、指導教員から授業後に児童がどのような力を身に付け、何ができるようになっているかを意識しながら、展開を考えるとよいと助言を受けた。これをきっかけに、目的意識をもって資料を探す等、教材研究をより充実したものにすることができただけでなく、児童の学習意欲を高める授業づくりという点で重要な考え方だと気付くことができた。

(2) 自己を管理し調整する力

「教員は体力勝負」という言葉があるが、演習ではまさにその通りだった。体力面はもちろん、将来を担う児童を育てるという強い責任と使命で、精神的にも大変な仕事だと実感した。したがって、日頃から心身の健康管理に努め、児童の学習のやる気を引き出すために、自分から授業に向かって前向きに臨むことができた。また、現場では、多様かつ多量の業務をやり切らなければならない。適切な時間配分をもって、先を見通して行動する力も身に付けることができた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

演習の中で、担任のある言葉「大変なこともあるけれど、児童の思いに応えて努力を続けていれば、必ずその成果が返ってくる仕事だから。」が印象に残っている。児童の思いは様々であるが、「知りたい」、「わかりたい」という学ぶことへの思いは人一倍もっていると考える。教員はその児童の思いに応えることが義務であり、使命である。そのために、常に学び続ける教員として、地道に努力を積み重ね、自己の研鑽に励んでいく。

(2) 今後の課題

主な課題は学習指導である。学習指導の中でも、ICT活用の基礎的な知識や技能がまだまだ足りないと考える。京都府は「教育環境日本一プロジェクト」の一環として、ICTを新しい時代の必須アイテムと位置づけ、積極的に活用している。ICTを活用することで、より広い視点から児童の学習意欲を引き出す授業を構想することができると考える。研修等を活用しながら、効果的なICTの運用スキルを身に付けるようにする。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童が安心・安全に過ごせる学級づくり」

受講生氏名：入江　優香

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

児童にとって学級は学校生活の大半を過ごす場所である。そのため、学級はどの児童にとっても居心地のよい場所だと感じることが大切だと考える。学級の雰囲気は授業にも影響する。互いに個性や能力を認め合い、「失敗しても大丈夫」という安心感があることで、自分の意見が言いやすくなる。この安心感が児童の主体性にもつながると考える。

そこで、児童一人一人を大切にし、個性や能力を最大限に伸ばすために、誰もが安心・安全に過ごせる学級づくりが大切だと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　休み時間や授業中における担任の児童への関わり方を観察

イ　担任への聞き取り

ウ　学びの実践と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

演習全体を通して、担任の先生をはじめたくさんの先生方の児童に対する声掛けの仕方を観察した。年度初めには、学級開きの様子も見させていただいた。先生方のご指導で気になったことは積極的に質問をし、自分自身も日々の児童とのコミュニケーションを大切にすることで、児童理解に努めた。「じぶんのよいところ」が主題である道徳の授業を実践した際に、児童同士がお互いのよいところを見付け、伝え合う活動を取り入れた。児童に、自分や他の人のよいところを大切にしてほしいことを伝えることができた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　学級経営において

児童一人一人のよいところや頑張りを認め、すぐに伝えることの大切さを学んだ。小さなことであっても、本人に伝えることで、自己肯定感が高まり、認めてくれる先生がいることが分かると安心することができる。また、教員が伝えるだけでなく、児童同士でよいところを見付け合い、帰りの会などで全体に伝えることをされていた。一人一人に違った個性や能力があり、互いに尊重し合うことで、安心・安全な学級がつくられていくことを学んだ。学級は担任と児童が一体となってつくり上げていくことを実感した。

年度初めには、学級開きの様子を見させていただいた。どんな学級にしたいか、どんな人になってほしいかを、学級開きの際にまずは教員から伝えることの大切さを学んだ。

イ　教員の影響力

教員の言葉遣いや態度は児童に大きな影響を与えることを学んだ。児童は教員の言動をよく見ている。学級担任から、同じ児童ばかり叱っていると、周りの児童も「その子にはきつく当たっていいんだ。」となり、その児童がいじめの対象になってしまうという話をしていただいた。全員が安心して過ごせるよう、指導した後は必ずその児童や他の児童に対してのフォローを行うべきだと学んだ。教員が児童一人一人を大切にする姿勢を示すことで、信頼関係が構築され、児童同士でもお互いを大切にし合う学級になる。どんな時であっても、心は常に児童に寄り添い、安心・安全な学級をつくっていきたい。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教育振興プランや教員として身に付けておくべき資質・能力、学級経営の方法や児童理解などについて学んだ。様々な専門分野の講師の先生方からお話を聞いたり、教員を目指す演習生同士で話し合ったりすることで、多角的な視点で物事を捉え、自分の考えを深める貴重な経験となった。「夢・未来」講座での学びを基に、今後、京都府の教員としてどのように実践するかを考えることができた。

その中でも第４回の「小学校における児童理解と学級経営」は、演習テーマに特に深く関わる内容であった。学級は、教員が一方的につくり上げることはできない。教員と児童の関わりによってつくるものであることを学んだ。学級経営を行う上で児童理解は最も重要なことであり、日々の児童とのコミュニケーションが大切である。教員として、積極的にコミュニケーションをとり、児童の言葉に耳を傾け、思いを受け止めていきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 気付く力

安心・安全に過ごせる学級をつくるには、児童の小さな変化にも気付くことが大切である。そのため、児童一人一人の様子をノートにメモを取ったり、自分から積極的に児童に話しかけたりすることで、日々児童理解に努めた。毎回の演習で続けることにより、少しずつではあるが、児童の小さな変化にも気付けるようになった。例えば、いつもは掃除時間になると、すぐに掃除にとりかかるが、ある日、教室の端から端を行ったり来たりして落ち着きのない児童がいた。様子がおかしいと思い話しかけると、「しんどい」と言っていたため、保健室に連れて行き、対応することができた。日々の児童理解を大切にしていたからこそ、この児童の変化に気付くことができた。

(2) 授業力

授業を実際に行い、自分自身で振り返り、現場の先生方からアドバイスをいただくことを繰り返すことで、多様な指導法について学ぶことができた。児童から出た言葉やつぶやきを大切にし、児童主体の授業にすることを心掛けた。導入部分では、日常生活と関連付けた話をすることで、児童の関心を高めることができた。他の演習生の授業では「自分ならばどうするか」を考えながら参観した。これらの実践から、授業力が身に付いた。今後は自分が学級経営を行い、安心・安全に過ごせる学級をつくり、授業力をさらに高めていきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

「教える」以外の教員の仕事もさせていただいたく中で、教員の多忙さを実感した。しかし、それ以上に児童との関わりの中で得られる学びは多く、やりがいを感じた。日々成長する児童の姿を一番近くで見ることができ、自分自身も成長できる小学校教員になりたいという気持ちがより一層強まった。児童と共に学び続け、笑顔あふれる学級、誰もが安心・安全に過ごすことのできる学級をつくる。児童一人一人を大切にし、それぞれの児童に合った指導をすることのできる教員を目指す。

(2) 今後の課題

授業力は成長した点でもあったが、課題も多く見付かった。特に時間配分が課題点である。一つ一つの活動に時間をかけすぎてしまい、一番時間をかけたい中心活動に時間をかけられないことがあった。学級経営と授業は両輪であり、児童の成長には、安心・安全な学級づくりとともに、質の高い授業をすることが必要である。課題である時間配分はもちろん、本時の目標を達成するための活動をしっかりと考え、授業力の向上に努める。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童一人一人の成長につながる学級経営」

受講生氏名：荒川　瑠璃亜

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 設定理由

教育実習や教員養成サポートセミナーなどで多くの児童と関わり、学級経営について学んできた。そこで、児童に寄り添った教育の重要性について改めて気付いた。個別最適な学びが求められる今、一人一人の成長を大切にしたいと考えている。実際に学級で個別にどのような指導や支援をされているのか学び、自身の学級経営に生かしたいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

学級の様子を観察し､気付いたことを詳細に記録し､自分なりに原因や効果を分析する。また、疑問に思ったことは担任の先生に確認する。そして、指導や支援に対する児童の反応や、その後の変化についても観察し続ける。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

３年生と４年生の学級に入り、一人一人の成長を大切に、学級経営をされているのを学んだ。児童にはどうするべきかを自分で考えさせるような声掛けをし、自立につなげられていた。児童との関係をつくるために会話を楽しんだり、一緒に遊んだりされていた。これらを意識して、休み時間や給食の時間など、授業以外でも積極的に児童と関わった。

(2) 演習校で学んだこと

ア　学級経営で大切なこと

発達段階に合わせた学級経営を大切にされていた。発達段階が異なれば、関わり方も変える必要がある。学年ごとに、関係を築く方法を知ることができた。例えば３年生の学級では、活動の前に「先生からのミッション」のように、児童の意欲を高めるような遊び心のある言葉選びをされていた。学年によって興味のあるものや理解度は変わることを意識して、関わるとよいことが分かった。また、学級開きの様子を観察する中で、一つ一つの行動を丁寧にすることが大切だと学んだ。例えば、児童が友達の筆箱を落としてしまったとき、筆箱を落とされた児童が拾おうとしたところ、先生は「落とした人が拾いましょう。」と声掛けをされていた。また、ノートを忘れた児童に代わりの紙を渡すとき、「何と言いますか。」と聞いてお礼をするよう伝えていた。このように、自分がしてしまったことは自分で責任をとる、お礼をするなど、人としての振る舞いを丁寧に指導することが児童一人一人の成長につながると考えた。

イ　諦めずに向き合い続けること

教員はコミュニケーションを大切にしなければならない。学級では場面緘黙の児童と出会った。そのような児童から気持ちを聞き出すことはとても難しく、試行錯誤して関わった。毎日声をかけ、「はい」か「いいえ」で答えられる質問をすることで、児童から話しかけてくれるようになった。信頼関係を築くことはもちろん、答えやすい質問を重ねることがよいと気付いた。一人一人の成長のために、どんな児童にも諦めずに向き合い続ける。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座は、演習校でよりよい教育をするためのヒントを与えてくれるものだった。例えば、学級経営において最も懸念しているのは学級崩壊である。これらは、児童がつくりだすものだと思っていた。しかし、担任が児童に対してぶれた接し方をすることで学級崩壊に陥ることがあると知った。実際に演習校で児童と関わるとき、教員として自分の軸をもち、一貫性のある関わりを意識することで、児童にもよい変化が見られた。このように、講義での学びを演習で実践することができた。

また、他の受講生と交流する機会もあり、多角的な視点で考え、学びを深めることができた。特に、教師の視点と児童の視点からテーマについて考えて比較することで、児童にとってよりよいと考える支援と指導を明らかにした。そして、交流した話題について振り返り、演習校で実践した。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童理解を授業に活かす力

これまでは、発問に関して児童の予想外の反応にも対応することが課題であった。児童の意見が活発になる発問を工夫したが、意見が出るほど授業の内容から逸れていく場面があった。授業の目的や大切にしたいことを明確にすることで、授業の軌道修正をした。また、その学級の児童一人一人を理解することにより、つまずきを予想することができ、どのような指導や支援をするのか、具体的に準備した。学級経営と授業のつながりを意識して、児童がよりよい学びができるよう努めた。

(2) 気付く力

連日にわたり一日を通して学べたため、児童の小さな変化に気付くことができた。また、授業だけでなく、休み時間や給食の時間、宿題の様子からも見られる成長や異変に気付く努力をした。成長に関しては本人に伝え、自信につなげられるようにした。異変に関しては、その背景に問題がある可能性を考え、担任の先生に相談して、事前に防ぎ、深刻化しないようにした。このように、細やかなことに意識を向けることで、新たな気付きにつなげた。この気付く力を生かして、児童の困り感を未然に防ぎ、一人一人の成長につなげることを目指す。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

児童にとって教員の存在は大きく、人生に影響する。また、児童一人一人に個性があり、効果的な支援も様々である。具体的に実践を見て学んだ経験を生かし、児童と真剣に向き合い、それぞれのよさを最大限に伸ばす努力をする。そのために、日頃から児童をよく見て小さな変化にも気付き、褒めたり問題を未然に防いだりする。児童一人一人の成長に関わることに誇りと責任感をもって、児童と成長し続ける教員になる。

(2) 今後の課題

今後の課題は、特別な支援を要する児童への理解と指導力である。通常学級にも、特別な配慮を必要とする児童が在籍する。そのような児童に対して適切な指導や必要な支援をすることが課題として明らかになった。今後、実践を通して学んでいくため、ボランティア等に参加したい。その中で、担任がそのような児童とどのように関わっているかを観察したり、実践を聞いたりしながら学び、一人一人の理解はもちろん、児童との関係を築くことから始める。実際に担任をした時には、児童一人一人の成長につなげる学級をつくる必要があり、児童にとって適切な指導を明らかにして、実践するよう心掛ける。